熊日1964.12.29

# 最後の仕上げ急ぐ

## 湯の児温泉病院

# 来春三月には開院

### 水俣病に限らず 一般マヒ患者も収容

温泉を利用したリハビリテーションセンター、水俣市立病院「湯の児温泉病院」は、完成を前にして最後の仕上げを急いでいる。

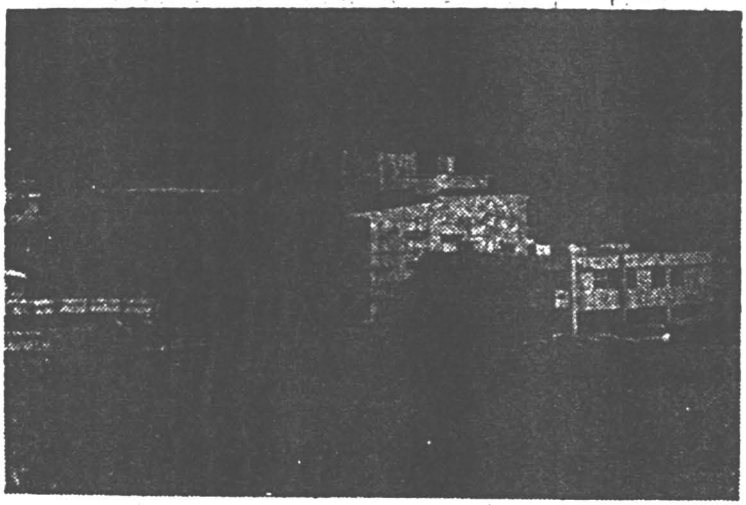
同センターは水俣病患者を更生社会復帰させるための治療と訓練が目的。二期工事を含めて鉄筋コンクリート四階建て延べ五千平方メ。総工費は二億円。二百ベッドとなる温泉治療施設にたいする回復訓練装置、温浴装置のほか、九州で初めての"塩水プール"もある。プールにはロープを張り、患者たちはこのロープにつかまりながら泳ぐ。淡水よりも浮力が強いので、大気の中では動きにくいマヒした手足も、少ない抵抗で動くわけ。動かすことによって手足の機能を回復させるのがねらい。

また九大温研の矢野教授の助言によって泥浴施設もつくる。泥浴は身体の内部まで浸透するので、血液の循環もよくなり、水銀の体外排せつに効果がある。有明海のガタ土（海底土）を運び、さらに効果を高めるためイオウ分も加える。

本館は外装をほとんど完成、あとは内部の整備だけ。別棟の回復訓練棟の方は骨組みは完成、内外装を急ピッチで進めている。完成は来春三月末。三月一日からは開院の予定である。

市内の水俣病患者は六十八人。うち二十三人が市立病院の水俣病棟に入院、残りは自宅で療養を続けている。二百ベッドのうち三十ベッドはこの患者の入院のために確保、残ったベッドは一般患者を収容する。水俣病患者だけでなく、小児マヒ、中風など神経症状による手足の不自由なものにとっても最大のプレゼントとなる。

敷き地は不知火海の波が打ち寄せ、はるかに天草の島々を望む。背後には緑の山をひかえた風光明媚はよしろ。近くには国民宿舎も近く建設され、市内のヘルス地区になる。



完成近い湯の児温泉病院